



誌上ライブ講演会

「論語と算盤から学ぶ企業フィランソロピー」

国際交流センター理事長、
コモンズ投信株式会社会長
渋沢 健

1987 年 UCLA 大学 MBA 経営大学院卒。1987 年、ファーストボストン証券会社(ニューヨーク)入社。JP モルガン銀行(東京)、JP モルガン証券(東京)、ゴールドマン・サックス証券会社(東京)、ムーア・キャピタル・マネジメント(ニューヨーク)を経て、2001 年にシブサワ・アンド・カンパニーを創業、2008 年にコモンズ投信設立、会長に就任。2012 年から 2014 年 3 月まで公益財団法人日本国際交流センター理事長を務める。主な著書に『30 歳からはじめる お金の育て方入門』(同文館出版 2013 年)、『渋沢栄一 明日を生きる 100 の言葉』(日本経済新聞出版社・2013 年)など多数。本講演は 2014 年 2 月 27 日、公益社団法人 日本フィランソロピー協会主催の企業フィランソロピー大賞贈呈式における特別講演を I-O ウェルス・アドバイザーズが渋沢氏、日本フィランソロピー協会の許可を得て文章にしたものです。

みなさん、こんにちは。ただいま紹介いただきましたコモンズ投信の会長の渋沢健です。今日は「論語と算盤」というテーマで私の持論などをお話したいと思います。

フィランソロピーという言葉ですが、フィルというのは古代ギリシャ語で愛のことです。アンソロピーは人類のことですから人類愛、それがフィランソロピーという言葉の語源です。昨年の夏にコモンズ投信ではセミナーを企画しました。それは「愛と資本主義」というかなり無茶苦茶な(?)テ





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

一マのセミナーだったのですが、その時のトークセッションでふと思いついて「愛と恋の違いはなんでしょうね」と問題提起してみました。英語では愛も恋も LOVE なんですね。トークセッションに参加していただいた森美術館の南條史生館長が、ある哲学者の言葉を引用して次のように答えてくださいました。「お互いを見つめ合うのが恋である。一方、愛というのは同じ方向を見るということだ」とおっしゃいました。私はそのお話を聞いて、日ごろ、思っていたことがすごくストンと心に落ちたんですね。通常、愛と資本主義はまったく別の次元のものとしてとらえられています。むしろ、資本主義などは悪者の世界であると思われる節もある。しかし、資本主義とは現在から未来へという同じ方向を見て資本が集まることです。そして、愛も、お互いに未来の方向を見ているということもありますね。共にこれから未来に向けて目を向けているということで、愛と資本主義に通じるところがあるのではないかと考えています。

私自身これまで勤めてきた会社は結構、カタカナの会社が多かったのです。20代、30代のころは売った、買ったのトレーディングの仕事をしていました。その私にウェイクアップ・コール、つまり、目覚まし時計が自分の体の中で鳴った瞬間があったのです。それがこの写真の時だったのです。

これはアメリカ西海岸のシアトルでの写真です。シアトルといえばイチローなどを思い出すかたも多いでしょう。あるいは、アマゾンとかマイクロソフトなどのベンチャー企業も多いところなのです。

アメリカ人はシアトルというと非常に雨が多いところというイメージを持っています。シアトルの人にそう言うと、いや、それはわざと雨を降らしているのだと言います。それは人口抑制、ポピュレーション・コントロールだということです。なぜなら、こんなに美しい所でいつも天気良かったら、たくさんの人が来てしまう。だから雨がなくてちょうどいいのだという訳です。まあ、それぐらい本当に雨の多い所です。

この写真の日をご覧のとおり素晴らしい青空の晴天でした。しかし、私の心の中は結構、重い雲がかかっていました。なぜならこの日は2001年9月11日の朝だったのです。この日、私はシアトルからワシントン DC に飛ぶ予定でした。しかし、当然、飛行機は全然飛ばない状態でした。それでシアトルに足止めとなったのです。



私はこの青空をみてこんなことを思っていました。私はこの半年前に独立したばかりでした。長男が生まれたばかりで次男が妻のお腹にいた。それまで、私がいた世界の常識は電話一本で何十億円、何百億円の資金が動く世界でした。たった数分で、何千億円だって動かした時もあります。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

そのようなことを常識だと思っていた私という人間がこの青空を見て、飛行機が飛んでいない、人も物も動かない、では、これからどうやって自分や家族を養っていけば良いのだろう、そのような危機感をその時に覚えたのです。

この青空を見た時に私が思ったことは、ああ、戦争というのはこんなにきれいな青空から始まるのだなあということでした。そんな気持ちになったのです。平和というのは空気のようなものだ、あるのが当たり前だが、それが失われた瞬間に死活問題になる。そのようなことを瞬間的に感じたのです。この日は全然、予定がなくなりました。たしかラジオだったと思いますが、シアトル市民に「インターナショナル・ファウンテンに集まりましょう」という呼びかけがあったのです。そのインターナショナル・ファウンテンって一体何だろうと思って調べて、行ってみたらこの写真のようなところでした。

この真ん中がファウンテン、つまり、噴水なのですが、このようにたくさんの人々が集まっていました。別に何かスピーチがあるわけではない。ただ、人が集まってきていたのです。なぜ、人が集まるのか……。アメリカですからよく見ていただくとわかるのですが色々な人種の人があります。ちょっと見にくいですが頭にターバンを巻いている人もいます。5～6 人の中東系の男性でした。そのときのアメリカ市民から見れば、中東は「敵」だったのです。しかし、彼らは花を持ってきてこの噴水のところに捧げたのです。その時に何が起こったかということ、みんなが大きな拍手をしたのです。見ていた私も感動して涙が浮かんできました。そのような出来事があったのです。

なぜ、ここに人が集まったのだろうか。私が思ったのは、ひとつは「共感」があったということ。何に対する共感かと言えば、ほんの何時間か前に尊い命を落とした魂に祈りをささげるということです。そして、もうひとつ、みんな、答えを求めていたと思うのです。その答えというのは、これからの自分の人生はどうなるのかということです。自分の生活、自分の子供、兄弟、同僚、仲間、みんなどうになってしまうのだろう。誰もこの瞬間は答えを持っていなかった。何にみんなが共感したかということ、これからの未来に向けての持続性なのですね。サステナビリティに対してみんなが答えを求めていた。だからここに集まったのではないか。そう思っています。

散らばった存在が寄り集まるためには共感が必要だということです。この場合の共感自分たちの未来に対する持続性だったのだらうと思います。これが私にとってのウェイクアップ・コール、ターニング・ポイントだったのです。それは先ほど、平和は空気のようなものだと言いましたが、平和というのは自然現象ではなく、一人一人が意識をして作ってゆかなければ維持ができないもので、そこに市民社会というもののベースがあるのではないかと思ったのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

さて、話は変わります。東京都中央区日本橋兜町 4-3、ここに何があるか、みなさん、ご存じでしょうか。兜町ですから東京証券取引所だと思われるかも知れません。東証から 100 歩ぐらい歩いたところなんですね。どこにでもありそうなビルですが角にプレートが埋め込んであります。プレートには「銀行発祥の地」とあります。同じこの地で 140 年前に第一国立銀行が私の祖父の祖父にあたる渋沢栄一により創立されたのです。「国立」という名前がついていますが、これは 100% 民間が出資した銀行です。なぜ、国立なのかというと、初めて日本の法律で定められた銀行だったからです。



我々は銀行と聞けばそれがどのような社会的な存在なのかすぐにわかります。しかし、当時は銀行が存在していませんでした。銀行という言葉も造語でした。設立の 1873 年当時、銀行というのはベンチャービジネスだったのです。当時の日本に銀行というベンチャービジネスの社会的存在感を伝えるために渋沢栄一はこのような例えを使っています。「銀行は大きな河のようなものだ。銀行に集まってこない金は、溝に溜まっている水やポタポタ垂れている滴と変わらない。折角人を利し、国を富ませる能力があってもその効果はあらわれない」ということを言っています。

つまり、お金は資源なのですがその資源が小さく溜まって、散らばっているだけでは力にならない。資金が銀行に寄り集まってくれば、それは日本の未来発展という大河のような原動力になる。そのような考え方を持っていたのです。そう考えますと先ほど、最初にご紹介した共感で市民が寄り集まったインターナショナル・ファウンテンの写真と、銀行という存在の原点はあまり変わらないと思うのです。

当然、今日、我々が銀行にお金を預けるのは安心、安全を求めるという共感です。あるいは、ファンドに投資するのは儲けたいという共感があるのかも知れません。やはり共感ということがないと、散らかった存在が集まらないのではないかと思います。

リーマンショック以降、資本主義が悪者にされました。ファンド資本主義とか、グローバル資本主義とかが悪とみなされていたのですが、本来、我が国の資本主義の原点にある考え方は渋沢栄一が言っていることにあると思うのです。つまり、散らばった資源が寄り集まって、同じ方向を向いて未来に向かっての大きな大河になる。そのような考えではなかったかと思うのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

渋沢栄一は論語と算盤を提唱しました。論語は道德、算盤は経済ですね。これを今の言葉で表現するにはどのようなものが良いのか。考えてみたところ幾つかヒントがありました。論語と算盤は書籍になっているのですが、そのなかに合理的経営という章があります。その中で渋沢栄一はこんなことを言っています。「その経営者一人がいかに大富豪になっても、そのために社会の多数が貧困に陥るようではその幸福が継続されない」、つまり、一人勝ちしたとしても短期的にはいいかもしれないが、それだけに固執しているとその幸せは長続きしないかも知れない。継続しないと警告しているのです。

別のところでは「正しい道理の富でなければその富は完全に永続することができない、従って、論語と算盤という懸け離れたものを一致させる事が今日のきわめて大切な務めである」と言っています。つまり、道德と経済は一致すべきだというわけです。今の言葉で論語と算盤が何を意味するかと言うと、先ほどご紹介した持続性、サステナビリティではないかと思うのです。当然ながら算盤勘定ができないと持続性はありません。しかし、算盤勘定だけだと足元をすくわれてしまうかもしれない。

一方、論語を読みだすとお金儲けなど卑しいという価値観を持つ人もいます。それはそれで結構かもしれませんが、それだけだと何も始まらないのです。この論語と算盤の中で一番、重要な言葉というのは論語と算盤の真ん中にある「と」だと思います。「か」ではなく、論語「と」算盤。渋沢栄一の言葉を色々読んでみると、論語のために算盤を犠牲にしろとはどこにも書いていない。逆に算盤を高めないといけなうと言っている。なぜ、高めないといけなうかという自分だけではなく、商業人の存在感を高める、日本の国力を高めるためということを考えている。そのためには道德も大切だし、さらに算盤も高めることが必要である。つまり、論語と算盤というのは経営の本というよりはむしろ、国家論に近いのではないかという印象を私は持っています。論語も算盤も車の両輪というイメージです。片方が大きくて片方が小さいと、車は同じところをくるくる回ってしまう。両方とも同じサイズであることによって未来に向かって前進できる。そのような考えではないかと思います。



さて、ここはどこでしょう。ジュラシック・パークみたいですが…。実はここはミャンマーです。ヤンゴンから高速道路を車で2時間半ぐらい北に向かって走ってそのベースキャンプからまた30分ぐらい奥地に入るとこのようなジャングルです。そこから歩き始めました。ちょうど雨季で車を降りた途端にどしゃぶりになり、この道が結構、坂道だったのですが、それが川のようになったのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

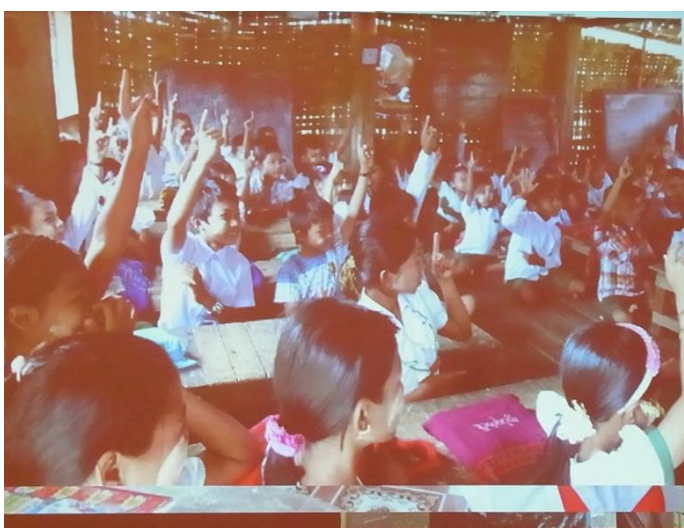
20～30分ぐらい歩いて行ったらこのような建物の集落につきました。このような所で住んでいるのです。なぜ、ここに行ったかと言うと、これはマラリア支援プロジェクトの視察でした。ここは実はマラリア地域だったのです。このように窓を閉めることもできない家で、夜になると蚊がブンブン飛んできてくる。そういうところで暮らしているんですね。



で、この若者たちは何をしていますかと言うとボランティアなんです。この地域には集落が700ぐらいあるらしいのです。この若者たちが途中までは車で送ってもらうようですが、そのあとは徒歩で集落へ行き、マラリアに感染していないかをチェックし、もし、感染していたらそこで治療をする。薬を飲んでいないかを確認する。そのような活動をしているのです。



なぜ、ここに行ったかと言うと、実はこれをサポートしているのがグローバル・ファンド(世界基金)という国際的な基金です。実は世界基金はマラリア、エイズ、結核という三大感染症によって発展が抑制される途上国において、疾患を撲滅はできなくても、せめてコントロールすることによって開発を支援することが先進国の責任であるということで動いている世界的な基金です。



実はこの基金の生みの親が日本だと言われています。おそらく皆さん、ご存じないと思います。2000年の沖縄サミットで日本政府が提言したのがこの三大感染症を先進国の責任でコントロールしようということを提言して世界基金ができたのです。ほとんど99%の資金は政府が出しています。我々の税金を使っている



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

わけで、その資金が実際にどのように使われているかを国会議員の目で実際に見ていただくという視察だったのです。

先進国ではエイズは薬さえもらえばちゃんと普通の生活ができるぐらいまでコントロールできる病気になっていますが、高価な薬なので途上国では手に入らないのです。そこで世界基金がお金をだして運営ができています。そのような活動です。

ミャンマーは軍事政権で、ゲイやエイズの人、セックス・ワーカーたちは社会から疎外して存在しないことになってしまう。そのようなことから、逆に感染症が広まってしまう。そこで彼ら・彼女たちに憩いの場を提供して、集まったらきちんとした感染防止の教育をする。そのようなこともしているのです。

なぜ、これをご紹介したかと言うと、ここに重要なメッセージがあると思うのです。つまり、遠い国で我々の今の生活と関係ない人たちですよ。でもそのために動くというのは「我がコト感」だと思うのです。遠い世界とか、自分とは関係ないかもしれない、今ではなく未来かもしれない。しかし、今の自分のためと同じように動くということ、「我がコト感」というのが大切なのではないかと私は思います。



例えばこういうのはどうでしょう。上の白黒写真は 1965 年。真ん中にいる子供は私です。そして下は現在の我が家です。私は子供が 3 人いますが、当時と今では見た感じは全然違います。しかし、親の私が子どもだった時代と、今の時代で変わらないこともあると思っています。私は親から期待と希望を受け継ぎました。それは、健康に育ててほしい、躰もちゃんと守って、勉強もほ



どほどして、それなりの大学に進んで良い仕事をして、いずれいい人と巡り合って、そして幸せな平和な生活をしてほしい。まあ平凡な期待、希望なんですけれど、自分は自分の子供たちに全く同じ期待と希望を持っているんですね。これは私が思うにはすごく大切な、大切な信念だと思っています。今日よりも良い明日になってほしい。前の世代から次の世代へ、今日よりも良い明日になってほしい。これは日本人であろうが、アメリカ人であろうが、ミャンマー人であろうが同じだと



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

思うのですね。この気持ち、今日よりも明日は良くなって欲しい、それが実は大切な使命感なんだけれど、そのような思いはいろいろなところで一滴、一滴、ポタポタと垂れ流し状態になっているのが現在、今の世の中ではないかと思うのです。だから、それらを寄せ集めることができれば、そこで共感資本ですね、共感資本になるのではないかと思います、コモンズ投信という会社を立ち上げました。コモンズ投信は30年投資ということをやっていますが、これは30年持ち続けるということではありません。次の世代を越えられる投資って何なんだろうと考えると、今の現役世代の我々、20代、30代、40代、50代が将来がより良くなってほしいという思いを込めて毎月コツコツ積み立てる。これを日本全国から集めると、非常に大きな長期資本になる。そのようなことが共感資本であると考えています。今日は投資セミナーではないので話が長くなって申し訳ないのですが、そのようなことを考えています(笑)。

もう一つの試みとして、実はコモンズ SEEDCap という社会起業家応援プログラムを設けています。これは、コモンズ投信に投資をしていただいている方々から頂戴している信託報酬 1.15%の中から、さらに1%を今日よりも良い明日を築くことに取り組んでいる社会起業家を応援する寄付プログラムです。毎年10月にコモンズ社会起業家フォーラムというのも開催していて、今までこの分野の第一人者の方々に登壇していただきました。このメンバーから毎年、一名を選考して応援する。そんな仕組みです。実は、去年の年末に「ザ・2020 ビジョン」という新しいファンドも立ち上げましたが、こちらの方からの信託報酬の1%相当はパラリンピック関連に寄付することになっています。

なぜ我々のような運用機関がこういうことをしていると「CSR」と思われるかもしれません。しかし、私はCSRという言葉は使っていません。私は金融機関の社会的な存在は3つあると思っています。ひとつは一般家計から経済活動している企業へ長期資本を循環させ、その収益の一部を家計に還元する、このような横の循環です。もう一つ、特に今の時代に重要な循環というのは、縦の循環だと思っています。つまり、日本は60歳以上の方々が6割以上の金融資産を持っているのですが、親の世代から、それを次の世代、縦の循環をするということも大切であり、それをお手伝いするのも我々の存在意義だと思っています。そして三つ目は営利から非営利だと思っています。寄付行為なのですがCSRと我々は呼んでいないのは、私から見ると寄付というのは超長期投資なんですね。投資というのはお金を出資して、それが自分のところに戻ってくるというのが、普通の考え方ですが、寄付というのは、自分には直接還元されない。しかし、自分の子供とか孫の世代のために、今日よりも良い明日を残すための活動への出資、つまり、投資なんですね。

寄付文化ということをよく言いますが、日本で寄付が文化になっていますか？あるいは長期投資が文化になっていますか？たぶんノーという返事になると思います。文化というと、生活の一環として、あまり考えなくても意識しなくても自然に行動するのが文化だと思うので、まだ寄付とか長期投資は文化になっていないと思っています。つまり、何故かと言うと、ひとつはいわば、これらは西欧的な価値観があるからという事かも知れません。確かに神が一人いて人間の行動を見る。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

今のこの世の中で、良い行い、悪い行いをすべて神は見ている。それで神は判断をするわけですね。そして天国に行くか地獄に行くかが決まる。結構、因果関係と時間軸がはっきりしている。それらは西欧的な宗教の根底にある様な気がします。

一方、日本的にはや八百万の神じゃないですか。我々は神社に行って何をするかというと、ガラガラと鐘を鳴らす。そしてぽんぽんと手を叩く。あれは神を呼び起こしているんです。ですから、八百万の神のひとりが「じゃあ私が行こう」と出てきてくれる。これは神様オン・デマンドなんですね。今の行いを神が見ていて、だから将来どうなると言うのではなくて、その時に鐘を鳴らせば神様が来てくれる。日本人はお祭りが好きですね。お祭りというのは山から神を呼び起こす。それがお祭りです。そしてお祭りが終わるとみんなシュンと普通の生活に戻る。だから時間軸の因果関係を考えて何かをするということに慣れていないのかなあ、などと思います。

しかし、先々週、一回目の大雪の時に奈良に行く機会があって、そこで奈良型の寄付文化という面白いトークセッションに参加しました。そこでトークセッションのお相手であった中村元市長の問い掛けにヒントをいただいたのです。奈良の春日大社は平成 27 年、28 年に 20 年ごとに社殿を立て替える第 60 次式年造替を迎えます。そこで市長がおっしゃったのは 20 年に 1 回寄付をするのではなく、我々が長期投資でやっているような積立、毎月少しずつ 20 年後のために寄付を積み立てていく。そのようなモデルは考えられませんかねと聞かれたんです。私もそれは面白いなと思いました。何故かと言うと、日本人の中では西洋的な因果関係の意識が乏しいかもしれませんが、周期性とか、あるいは季節性というのが日本人の文化として根付いている。ですから、寄付とか長期投資というものを西欧的なコンテキストの中で広めようとするのではなく、もともと日本人が持っているそのような周期性とか季節性というところに落とし込むと案外すんなりと受け入れてもらえるかも知れない。文化として根付くかもしれない。そのようなヒントをいただいたので、これから皆様と一緒に考えていただければ嬉しいと思います。

以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。